「1 年生でマスターさせる平仮名指導」の研究
過去５年間の読み書き調査の結果を基に、平仮名指導の手立てを検証する

勇 和代
Isami Kazuyo

要旨

平仮名指導は、カリキュラム上１年生１学期に終えることになっている。短期間にどの子にも平仮名の読み書きをマスターさせるためには、指導の手立てが必要だ。読みに効果があったのは、「フラッシュカード」「音読」「暗唱」「読み聞かせ」である。書きでは、基本的に「ひらがなスキル」を使って『指書き』『なぞり書き』『写し書き』を行い『空書き』で点検する方法である。平仮名一文字を教える際の「ことばあつめ」や音韻を意識して「拍を手で打ち言葉を言う」ことは、児童の自発的な活動となった。また、調査でわかった間違えやすい文字は、注意して教えたり、子どもに間違い探し問題を出したりして活用した。これらの指導により、学習後にはどの子にも平仮名の読み書きの習得が見られた。また、特殊表記の文字や助詞の使い方は繰り返し学習する必要があり、1 学期にとどまらず 1 年間かけて教えていく事が大切である。

キーワード：1 年生、平仮名の習得、平仮名の活用、保幼小連携（K12）

Ⅰ．問題提起

筆者は、今までに１年生担任を９回、平仮名専科①を２回担当してきた。この平仮名専科の年をきっかけに「平仮名指導」について調査研究を始めた。

幼児が平仮名のおおよそを読めるようになるのは、5歳ごろである。 津守・稲毛式乳幼児精神発達質問紙（知能検査）では、質問項目にこうある。

「54 か月（4歳6ヵ月）：自分の名前を読む。
60 ヵ月（5歳0ヵ月）：わからない字があると、大人に聞く、自分の名前を平仮名で書く。
72 ヵ月（6歳0ヵ月）：平仮名をほとんど全部読む。」（＊文献 1）
（※この月齢は、半数の子どもができるようになる、中心値である）

6歳までに、平仮名をほとんど読むというのが子どもの発達にかなっていると言える。現に学校に入学してくるこどもたちに4月当初に読みの調査を行った場合7割から8割の児童は平仮名が読める状態になっている。幼児期には十分に文字を獲得するための準備期と考えたい。

また、次のような活動も大切である。

表１．書字の発達過程（＊文献2）

1～4歳	絵を描くことを楽しむ	視覚認知力・協調運動
4～5歳	図形の模写ができる	視覚運動統合能力
5～6歳	想起して図形が描ける	空間認知力
6歳以降	伝達手段として文字が書ける	運筆力

ひし形が描ける程度の視覚運動統合能力が育っていれば、平仮名の模写もできる。

表２．視覚運動統合能力の発達過程（＊文献3）

2歳頃	縦線、横線の模写が可能。
3歳頃	閉じた円の模写が可能。
3歳半頃	縦線と横線を交差させて十字を模写。
4歳頃	四角形の模写が可能。
5歳～5歳半頃	三角形の模写が可能。
6歳半頃（小学校入学前）	ひし形の模写が可能。

また K12 の視点から文字指導について調べた。

表３．言葉に関するねらいの表記の比較

保育所保育指針（2017 年）	幼稚園教育要項（2017 年）	小学校学習指導要領(2017 年)
【環境】 ねらい ③ 身近な事象を見たり、考えたり、扱ったりする中で、物の性質や数量、文字などに対す る感覚を豊かにする。 内容 ⑩ 日常生活の中で簡単な標識や文字などに関心をもつ。 【言葉】 ⑩ 日常生活の中で、文字などで伝える楽しさを味わう。	【環境】 ねらい (3) 身近な事象を見たり、考えたり、扱ったりする中で、物の性質や数量、文字などに対する感覚を豊かにする。 内容 (10) 日常生活の中で簡単な標識や文字などに関心をもつ。 【言葉】 (10) 日常生活の中で、文字などで伝える楽しさを味わう。	第1学年及び第2学年 【知識及び技能の習得】 話し言葉と書き言葉 イ 音節と文字との関係、アクセントによる語の意味の違いなどに気付くとともに、姿勢や口形、発声や発音に注意して話すこと。 ウ 長音、拗音、促音、撥音などの表記、助詞の「は」、「へ」及び「を」の使い方、句読点の打ち方、かぎ（「 」）の使い方を理解して文や文章の中で使うこと。また、平仮名及び片仮名を読み、書くとともに、片仮名で書く語の種類を知り、文や文章の中で使うこと。

保育所保育指針や幼稚園教育要綱には、「文字などに関心を持つ」事がねらいとされているが、文字指導に関しては、園によってバラバラで「自分の名前の読み書きができていれば十分」という方針の園がある一方、「平仮名はもちろん漢字もできる」という園もある。

このように、生活環境が違う子どもたちが小学校に入学し、一つのクラスで授業を行うのであるから、小学校の平仮名学習には、どの子にも平仮名が定着し、興味を持って学習できる手立てが必要だと考えた。入学前は、本当に自分の名前だけの読み書きができるだけよいのだろうか。筆者は、それでは追いつかないと考える。現行教科書では、４月か平仮名 46 文字を学習し始め、７月には、平仮名を活用して短い文を書くところまで教えなければならない。文を書くためには、平仮名の特殊表記（促音・長音・拗音・長拗音）や助詞も使えなければならない。これが大変難しく、２年生以上になってもできない子どもたちがいることも事実である。

そこで、平仮名の読み書き調査を行い児童の実態を把握し、どの子にも定着する平仮名指導の手立てを明らかにしたい。また、特殊表記の指導についても工夫したい。

Ⅱ.子どもの読み書き実態調査（５年間）

１．読み調査

1)調査の方法

・調査対象：1 年生　410 人

・調査期間：2005 年～2007 年、2022 年～2023 年の５年間

・調査方法：平仮名テスト表（読み）（S 社国語テスト）

調査対象は、大阪府泉佐野市の公立小学校 1 年生である。入学後間もない４月と平仮名学習が終わった７月に同じテストを用いて読み書き調査を行った。

「読みの調査」は名前の順に一人ずつ呼んで、テストの文字を読んでもらう。読めない場合は、「わかりません。」と言えばよいことを最初に告げておき、できない子の不安を取り除いた。

・読み調査の内容:文字は全部で 46 文字である。また、評定を以下のようにした。

A・・すらすら全部読める。

B・・一字ずつ区切ってであるが全部読める。

C・・43 文字に届かない。（１～３文字間違う）

D・・４文字以上間違う

写真１．　読み調査テスト

2)結果

５年間で 410 名の回答を得た。以下、評定別の人数と、全体数から見た割合である。

表４．　４月の読み調査の結果　４月中旬実施

	2005 年度 133 人	2006 年度 98 人	2007 年度 119 人	2022 年度 32 人	2023 年度 28 人	合計 410 人
A	34 人(26%)	49 人 (50%)	74 人 (62%)	23 人 (72%)	14 人 (50%)	194 人 (47%)
B	68 人(51%)	27 人 (28%)	13 人 (11%)	８人 (25%)	８人 (29%)	124 人 (30%)
C	19 人(14%)	10 人 (10%)	17 人 (14%)	０人	２人 (７%)	48 人 (12%)
D	12 人(９%)	12 人 (12%)	15 人 (13%)	１人 (３%)	４人 (14%)	44 人 (11%)

4月と同じ読み調査テスト用紙を使い、読みの調査を行った結果である。

表５．　７月の読み調査の結果　７月初旬実施

	2005 年度 133 人	2006 年度 98 人	2007 年度 119 人	2022 年度 32 人	2023 年度 28 人	合計 410 人
A	63 人(47%)	82 人(84%)	103 人(87%)	29 人(91%)	25 人(89%)	302 人 (74%)
B	63 人(47%)	11 人(11%)	９人 (８%)	２人 (６%)	１人 (４%)	86 人 (21%)
C	５人 (４%)	４人 (４%)	４人 (３%)	０人	１人 (４%)	14 人 (３%)
D	２人 (２%)	１人 (１%)	３人 (２%)	１人 (３%)	１人 (４%)	８人 (２%)

表６．　読み調査４月と７月の比較

	合計 410 人
A	194 人（47%）
B	124 人（30%）
C	48 人（12%）
D	44 人（10%）

⇨

	合計 410 人
A	302 人（74%）
B	86 人（21%）
C	14 人（３%）
D	８人（２%）

3）読み調査をしてわかったこと

①4月に A･B 評定（全部読める）児童は全体の 77%であったが、7 月には 95%にまで上がっている。また、D 評定（4文字以上間違う）児童は 44 人から 8 人に減った。

②D には、 各クラスに2人程度、ほとんど平仮名を読めずに入学してきている子どもや発達遅滞の診断を受けている子どもがいる。これらの児童の中には、文字学習後どんどん追いついてくる児童もいたが、文字学習の LD が疑われる児童も数人いた。文字の形が分からないのである。赤鉛筆をなぞれるが、お手本を見て写すことができない。

③読みでは、50 音順の後半に読めない字が集中している。また、読みで伸びた児童は、授業の導入でフラッシュカードを毎時間繰り返して読んできた成果だと考える。

④すらすら読める児童と、拾い読みをしている児童の差が大きい。これは、どれだけ入学までの生活や遊びで文字を使ってきたかに影響されていると考えられる。

２．書き調査

1）調査の方法

・調査対象：1 年生　410 人

・調査期間：2005 年～2007 年、2022 年～2023 年の5年間

・調査方法：平仮名テスト表（書き）（S 社国語テスト）

　調査対象は、大阪府泉佐野市の公立小学校1年生である。入学後間もない4月と平仮名学習が終わった7月初旬に同じテストを用いて書き調査を行った。

　書きは担任が、国語の時間1時間を取り一斉に調査した。プリントには、カタカナが記載されており、担任が「ア欄に『あ』を書きます。」と1つずつ指示を出した。分からない文字には『・』を書くことで良いと、初めに言って不安を取り除いた。

・書き調査の内容：文字は全部で 46 文字である。また、評定を以下のようにした。

写真２．書き調査テスト

A・・全部間違わずに書ける。

B・・間違いが 1～2個

C・・間違いが3個～30 個

D・・30 文字以上間違う

2)結果

表７．　４月の書き調査の結果　４月中旬実施

	2005 年度 133 人	2006 年度 98 人	2007 年度 119 人	2022 年度 32 人	2023 年度 28 人	合計 410 人
A	38 人(29%)	34 人 (35%)	25 人 (21%)	９人 (28%)	５人 (18%)	111 人 (27%)
B	24 人(18%)	24 人 (24%)	24 人 (20%)	２人 (６%)	４人 (14%)	78 人 (19%)
C	65 人(49%)	33 人 (34%)	57 人 (48%)	18 人 (56%)	15 人 (54%)	188 人 (46%)
D	６人 (５%)	７人 (７%)	13 人 (11%)	３人 (９%)	４人 (14%)	33 人 (８%)

4月と同じ読み調査テスト用紙を使い、書きの調査を行った結果である。

表８．　７月の書き調査の結果７月初旬実施

	2005 年度 133 人	2006 年度 98 人	2007 年度 119 人	2022 年度 32 人	2023 年度 28 人	合計 410 人
A	97 人(73%)	59 人 (60%)	71 人 (60%)	28 人 (88%)	22 人(79%)	277 人 (67%)
B	21 人(16%)	17 人 (17%)	24 人 (20%)	１人 (３%)	３人(11%)	66 人 (16%)
C	15 人(11%)	22 人 (22%)	23 人 (19%)	２人 (６%)	３人(11%)	65 人 (16%)
D	０人	０人	１人 (１%)	１人 (３%)	０人	２人 (0.5%)

表９．　書き調査４月と７月の比較

	合計 410 人
A	111 人 (27%)
B	78 人 (19%)
C	188 人　(45%)
D	33 人 (７%)

⇨

	合計 410 人
A	227 人 (67%)
B	66 人 (16%)
C	65 人 (16%)
D	２人 (0.5%)

3)書き調査をしてわかたこと

①4月はほぼ書ける(A･B 評定)が46%であったが、7月には 83%に伸びている。D 評定児童は33 人から 2 人に減った。

②平仮名を読むよりも書くほうが難しく、「書けない」で入学してくる児童(C･D 評定)が 52%と半数いる。書きでは入学時、全文字書けなかった児童が1名。ほとんど書けない、自分の名前の文字程度なら何とか書ける児童が5名いた。特に、自分の名前も書けないという児童がいた。その児童には、記名の際に机に貼ってあるお名前シールを見ながら名前を書かせたり、教師が赤鉛筆で薄く名前を書いてなぞらせたりした。

③書きについて、46 文字がほぼ書ける状態で入学してきた児童は約 46%であった。約半分の子どもは、平仮名をマスターした状態で1年生になっている。ある程度文字に関しては意識が高いと

言える。また、ほとんど書けない状態の児童が2名いた。
④また、書きテスト(4月と7月)を並べて保護者に学期末懇談会で見せている。
　自分の子どもが平仮名をしっかり書けるようになったという事実の提示は、保護者に安心感を与えている。

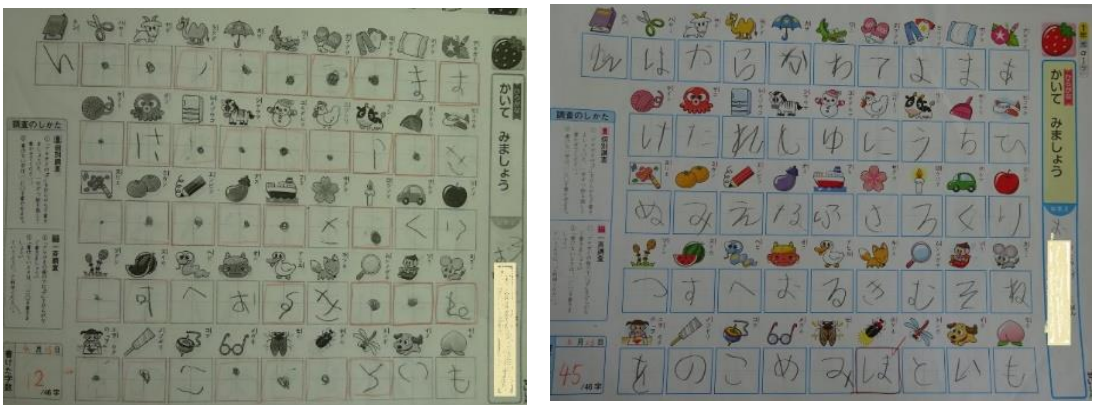

写真３．　同じ児童の書きテスト（４月と７月）

３．平仮名文字の分析

1）児童が読めなかったり読み間違ったりした文字

表 10. 子どもにとって読みの難しい文字

2005年			2006年			2007年			2022年			2023年		
文字	人数（人）	割合（%）	文字	人数（人）	割合（%）	文字	人数（人）	割合（%）	文字	人数（人）	割合（%）	文字	人数（人）	割合（%）
ぬ	14	10.5	ほ	13	13.2	ぬ	19	15.9	ぬ	5	15.6	ぬ	4	14.2
を	10	7.5	へ	12	12.2	ほ	14	11.8	を	4	12.5	を	2	7.1
ほ	10	7.5	を	11	11.2	ち	13	10.9	む	3	9.3	む	2	7.1
れ	10	7.5	わ	10	10.2	ね	13	10.9	ほ	2	6.2	ほ	2	7.1
は	9	6.7	れ	9	9	は	12	10.1	は	2	6.2	さ	2	7.1
ね	9	6.7	む	9	9	へ	11	9.2	ね	1	3.1	ゆ	2	7.1
ゆ	8	6	に	9	9	を	11	9.2	れ	1	3.1	れ	1	3.5
へ	8	6	ぬ	8	8.1	ふ	10	8.4				せ	1	3.5
や	7	5.2	ろ	8	8.1	む	10	8.4				そ	1	3.5
ろ	6	4.5	は	8	8.1	に	9	7.6				て	1	3.5
わ	6	4.5	そ	8	8.1	ろ	9	7.6				と	1	3.5
に	6	4.5				わ	9	7.6				な	1	3.5

　5年間を通して、ほぼ同じ文字が子どもたちにとって、難しいと感じている。それらは、「ぬ」「を」「ほ」「は」「れ」「む」「ね」である。これらは、紛らわしい文字である。例えば「ぬ」は「め」、「ほ」は「は」「れ」は「ね」というように、区別が付きにくい。
　また、あいうえお順でいうと、あ行・か行・さ行・た行あたりまではすらすらよめる児童が多い。口に出して読む機会が多いからではないかと思われる。

2）児童が書けなかったり書き間違ったりした文字

表 11.　子どもにとって書きの難しい文字

2005年			2006年			2007年			2022年			2023年		
文字	人数（人）	割合（%）	文字	人数（人）	割合（%）	文字	人数（人）	割合（%）	文字	人数（人）	割合（%）	文字	人数（人）	割合（%）
を	70	52.6	を	42	43.3	を	62	52.1	を	12	37.5	を	17	60.7
む	55	21.6	ほ	36	37.1	む	52	43.7	む	8	25	ぬ	14	50
ほ	54	40.6	む	34	35	ほ	50	42	ぬ	6	18.7	ろ	13	46.4
め	47	35.3	れ	30	31.9	ぬ	48	40.3	ほ	5	15.6	れ	13	46.4
れ	46	34.6	ふ	27	27.8	れ	44	37	れ	4	12.5	る	13	46.4
ぬ	43	32.3	ん	26	26.8	わ	42	35.2	ま	3	9.3	わ	11	49.2
る	41	30.8	ぬ	25	25.8	れ	41	34.4	ふ	2	6.2	ほ	11	39.2
ふ	40	30.1	わ	25	25.8	め	39	32.8	る	2	6.2	む	11	39.2
よ	40	30.1	め	24	24.7	ふ	37	31.1	よ	2	6.2	そ	9	39.1

これは圧倒的に「を」が難しい。形が取りにくいことと、くっつきの「を」という難しい使い方をするからである。また「ほ」は「ま」と混乱したり、「は」と間違えたりする。また「ぬ」は「め」と混同しやすい。「ふ」も毎年、書けない児童が多くいる。このように見ると、書きの難しい文字も、50 音中盤から後半に多い。

3） 鏡文字

表 12.　子どもにとって鏡文字になりやすい文字

2005年			2006年			2007年			2022年			2023年		
文字	4月	7月	文字	4月	7月	文字	4月	7月	文字	4月	7月	文字	4月	7月
ふ	3	1	つ	8	0	く	10	0	つ	4	1	つ	3	1
ほ	3	0	も	6	0	さ	7	0	く	3	0	し	2	1
と	3	0	く	5	0	も	5	0	し	3	0	く	2	0
せ	2	0	ち	4	0	き	4	0	と	3	0	よ	2	0
つ	2	0	さ	3	0	け	4	1	さ	3	0	け	2	0
し	2	0	し	3	0	つ	4	0	せ	2	0	へ	1	0
は	2	0	へ	3	0	と	4	1	な	1	1	き	1	0
も	2	0	に	2	0	へ	4	0						
く	2	0	せ		2	り	4	0						
け	2	1				う	3	0						

鏡文字は、4月当初は多くの割合で見られる。とくに一筆で書ける文字に多い。「つ」「し」「く」などである。左利きの児童にも鏡文字が多い。

しかし、7月のテストでは、ほぼ鏡文字は消え、正しく書けるようになっている。

Ⅲ. 平仮名指導の手立て

１．読みをマスターさせる指導法

1)フラッシュカード

授業の始まりに、文字や、言葉を繰り返し読む。カードの読み方もバリエーションがある。

- 平仮名一文字のフラッシュカード(手作り)
  - ①順に読ませる。
  - ②少しの部分だけ見せて読ませる。
  - ③一瞬だけ見せて読ませる。[2]
  - ④高速で読ませる。
- 平仮名ことばカード
  - ①絵と文字のカードを見せて読ませる。
  - ②文字の方を見せて読ませる。
  - ③一人一枚ずつ読ませる。(リレー)

写真４．フラッシュカード

フラッシュカードは、文字を読むのが苦手な児童に効果があった。また、 リレー読みは一人一枚ずつカードを読むので、緊張場面が生まれた。毎時間続けることで、苦手な子もだんだん読めるようになった。

2)音読

教科書の題名横に、〇を 10 個書き１回読むごとに１つ赤鉛筆で塗らせる[3]。よく読む子は、教科書が赤丸でいっぱいになり、褒めてあげるとどんどん練習する。また、子どもたち同士で競争しながら読みを進めることもある。

学校で統一して使っている音読カードがある。こちらは、保護者が家で音読を聞いてサインをするということになっているが、子どもの意欲と結びつく方法ではない。

写真５．赤丸

3)指でなぞりながら教科書を読む

教科書は基本、立てて両手で持ち、音読をさせる。

しかし、読みが苦手な児童には、教科書を机において指でなぞりながら音読をさせている。これは、一文字ずつ確かめながら読むことができる。教師も児童がどの部分を読んでいるのかがわかりやすい。読みで躓いている児童のそばに行き、そっと今読んでいる場所に指を添えてあげることもできる。

写真６．指でなぞり読み

4)暗唱

話す聞くスキル[4]を通年読み続ける。全部で 30 個近く日本の名文やことわざなどを覚えることができる。朝の挨拶の後、全員で声をそろえて読む。読むことに自信がつき、クラスのみんなと楽しい時間となる。後ろの黒板に書いておき、暗唱テストで全員が合格したら、次に進むことにしている。

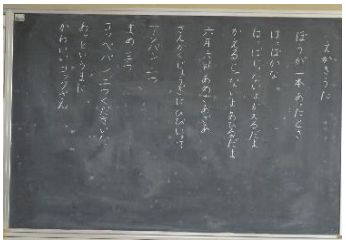

写真７．話す聞くスキルの課題

5)絵本の読み聞かせ

毎日行った。学習の集中時間が短い１年生には、授業の隙間時間や帰りの会の読み聞かせがよかった。また、文字に興味を持つことができた。

写真８　読み聞かせ

２.書きをマスターさせる指導法

1)平仮名学習スキルで定着させる。

①平仮名スキルの比較

今の勤務校では、例年決まった「ひらがなのおけいこ帳」を使っている。A４版縦長サイズでA社はじめ、各社（A社ほか４社）がこの様式を取っている。

しかし、前任校で使った「ひらがなスキル」が一番使いやすかった。これらを比較してみる。

写真9　ひらがなのおけいこちょう

〈メリット〉

・縦型で、開きやすく机に置きやすい。

〈デメリット〉

・書く文字が多い。（12 文字）

・一時間に２文字ずつ進む場合、おけいこ帳に時間がかかりすぎてしまう。

・おけいこ帳は、一度に何個も書く体力主義であるといえる。これでは、適当に文字を書いたり、飽きてしまったりする児童がでてしまう。

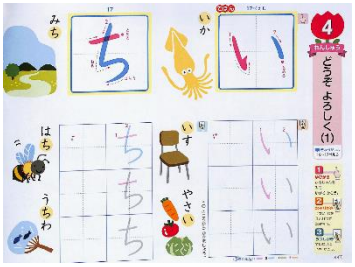

写真10　ひらがなスキル

〈メリット〉

・指書きを重視するため、鉛筆で書く文字数が少ない。（６文字）書くことに抵抗がある児童にもやさしい。

・「ひらがなスキル」は構成がいい。

①教科書順②五十音順③テストの練習（絵と言葉）④テスト

〈デメリット〉

・横開きで机に置きにくい。

定着の結果は、「おけいこ帳」も「ひらがなスキル」もあまり変わらない。しかし、どちらが時間的にも労力的にも優れた教材かといえば、「ひらがなスキル」だといえる。

②文字指導は１日2文字ずつ行う。

「言葉集め」 →「言葉のリズムうち」→「文字の部屋を確認」→「指書き⑤」→「目を閉じて指書き」→「なぞり書き・写し書き⑥」→「空書き」の順に指導する。 とにかく、テンポよく子どもが飽きないように変化のある繰り返しで指導する。

③「言葉集め」…「う」の付く言葉を子どもたちに発表させる。板書する。

言葉集めはとても大切だ。「う」のつく言葉を児童に発表させる。「うみ」「うさぎ」「うし」・・・とたくさ

ん出る。それらを黒板に書き、促音には(✓)、長音には(ー)、拗音には(ゃ)の印をつける。
④「言葉のリズムうち」…一音節ずつ、「手を打ちながら」(文献4)言葉を言う。このとき、促音や伸ばす音のある言葉は、手を握ったり、両手を上から下に下ろしたりという別の表現をして区別する。⑦そして手を打ちながら、言葉を唱える。「うみ」であれば、手を 2 回打ちながら「うみ」と言う。これは「音声法」の指導で平仮名は一つ一つの文字が集まってできていると考える方法である。

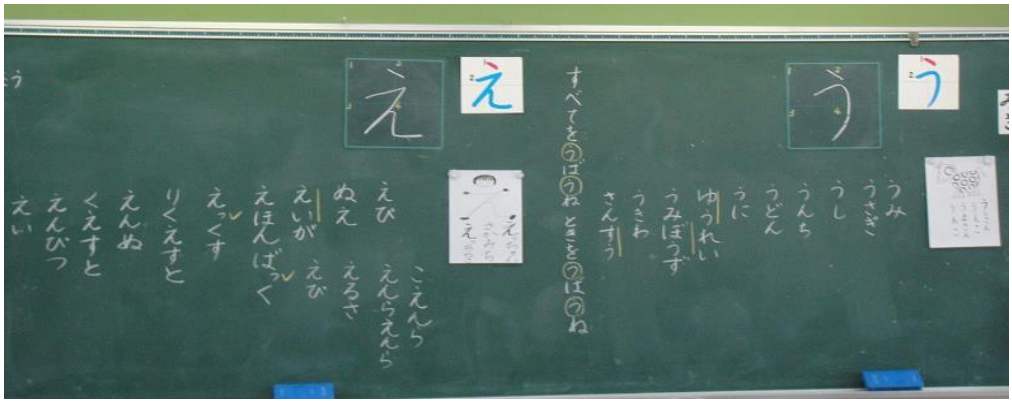

写真 11.　　黒板の板書の様子

⑤「文字の部屋を確認」…1 の部屋、2の部屋、3の部屋、4の部屋と呼ぶ。小黒板を使い、文字の始筆や終筆の位置などを確かめる。

1	2
3	4

図 1．文字の部屋

⑥「指書き」→「目を閉じて指書き」→「なぞり書き・写し書き」→ 「空書き」の順で、確実に書けるようにする。
・「指書き」とは鉛筆を持たないで、指で机の上に文字を書くことを言う。
・「目を閉じて指書き」は、おけいこ帳の大きな文字を、目を閉じてなぞってみることを言う。目を閉じることで運筆に集中できる。
・「なぞり書き」とは、お手本の薄い字をなぞりながら書くことである。なぞり書きは、「髪の毛一本(1 mm)もはみ出さないようになぞりなさい。」と指示を出す。「写し書き」とは、自分で白い枠の中に文字を書くことである。うつし書きは、文字の部屋を意識させて、文字の形に注意しながら書く。

⑦「空書き」とは、 空中に文字を書くことである。教師は、子どもの方を向いて反対書きができること。大きく書く。小さく書く。速く・ゆっくり・上を向いて・下を向いて・手のひらに書く・目をつむって書くなどバリエーションを豊かに何度も書く。また、友達の背中に習った字を書いて、なんて書いたかを当てることもとても喜んだ。

写真 12.　背中に書く

2) 黒板テスト
ある程度新出の平仮名が進んだら(5文字程度) 黒板テストを行う。黒板の上部に、お手本の文字を貼り、同じように字を書く。 これは子ども達がとても喜ぶ。書き順のチェックや直しもその場でさせることができる。見ている子も、どんな字を書くのかとよく見ている。教師が丸をつけて評定し、やり直しがあれば、再度黒板に書く。

写真 13.　黒板テスト

3)視写する

ジャンボホワイトボード®を購入し、子どものノートと同じマス目になるようにして視写させている。どこに文字を写すのかという質問が出ず、教師も子どもも快適である。

写真 14. ジャンボホワイトノート

4)聴写する

ノートの一番上の段に①から⑥まで番号を書き、教師が言う言葉を聞いてノートに書く。その後、黒板に教師が答えを書き、自分で答え合わせをする。ノートを教師が、点検する。早く終わった子は、言葉に関係のある絵を描いて待つ。

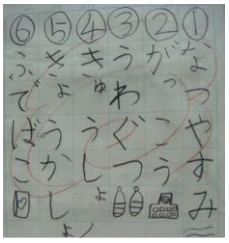

写真 15. 聴写ノート

5)黒板に文を書く

１年生にも、黒板を解放している。例えば、文作りで書けた子からノートを持ってこさせ黒板に文を写させる。写した子は、更に文作りを続けるように指示する。どんどん書こうという意欲に繋がる。

写真 16. 黒板に文を書く

6)間違い探し問題

書き調査で間違いが多かった文字では、間違い探し問題をよく出した。「みんなの中で、こんな間違いをした人がいました。どこがちがうかな？」というように問題を出すことで、理解が深まった。

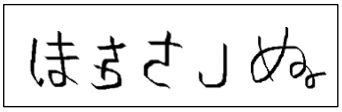

図２. 間違いやすい文字

7)宿題のバラプリント

平仮名学習の宿題をどのように出すのか学年で話し合った。学校でプリントを印刷するのは大変だということで、教材で購入することにした。しかし、これが厄介で表に 12 文字、裏に 18 文字も書かなければならない。しかも一日2枚の宿題を出すと、2枚目はどうしても雑になり、お直しをさせなければならないという悪循環となっている。

３. 平仮名指導の比較

1)どの文字から教えるか

3つの方法がある。

表 13. 平仮名を教える順番

①あいうえお順		教科書に関係なく五十音順に教える。「あいうえお」「かきくけこ」と順に進むので、次は何の文字を習うのかがはっきりしている。「ん」が終わったら、全部習ったという達成感がある。
②教科書順 一筆の文字から	T 社	「つ」「く」「し」「へ」「い」「こ」「あ」「う」「え」「お」・・・
	G 社	「つ」「く」「し」「こ」「と」「り」「か」「さ」「た」「ほ」・・・
	K 社	「く」「つ」「と」「り」「い」「し」「の」「あ」「け」「う」「え」「お」・・・
③教科書順	M 社	「い」「ち」「ね」「ん」「あ」「う」「え」「お」「り」「し」・・・

教科書によって、初めに教える文字が違うことが分かる。筆者は、どの方法でも教えたことがある

が、最初はやさしい文字から教える方がよいと思われる。しかし、「つ」「く」は逆さ文字になりやすい文字であるので注意が必要だ。

2）平仮名指導は、他にどのような教え方があるのか

我が国では明治5年の学制後、小学校に入学した児童たちに入門期の文字教育が行われてきた。その際に使われたのが教科書である。初めて国定教科書が作られたのは明治 37 年で、「最初の一年間は、片仮名だけを学習し、第二学年になって平仮名を学習し始め、二年間かけて両体の仮名文字を学習させようとした」（＊文献5）

そして戦後昭和 22 年の第 6 次国定教科書より平仮名文字から学習し始めることに変わった。その後は検定教科書となり、現在に至る。

検定教科書の初期は、「子どもの生活に密着した文から学習に入る事は子どもの学習を動機づけたり内容に関心を持たせたりする点では明らかに利点を持っているが、同時に、次のような欠点を持っている。（中略）（1）文字・音節の無秩序な提示は、学習者の学習過程を無視しており、子どもが当面する学習上の困難を軽視している。」（＊文献5）

このような教科書への批判があり、教育科学研究会(教科研)では、独自の教科書「にっぽんごもじのほん」を作り音声法を基にした指導法を確立した。ここに所属する須田清氏は、かな文字の教え方という本で「特殊音節のオ段」で「遠くの大きな氷の上を多くの狼十ずつ通った」（＊文献6)というお話を作った。これは現在も長音の授業で使われている。

大阪人権教育研究協議会では、1時間に1文字を丁寧に教える方法をとっている。筆者も過去に平仮名指導の時に若干取り入れた。粘土で文字を作ったり、「し」を習うときに「しゃぼん玉」をしたりする。児童は楽しみながら学習を進められるが、莫大な時間がかかる。また担任が準備や片付けをするとなると、大変な労力である。また、実際に文字を書くよりも、遊びの方に重点を置きがちになる。

3）語形法と音声法について

平仮名指導を調べていくと、語形法と音声法の2種類があることが分かった。今の教え方は「音声法」である。これは「日本語のかな文字は音節で表す文字であって、1音節に1文字が規則的にあてはめられている」（＊文献6） ことから音韻を意識しながら教える方法である。例えば「あり」は2つの音で平仮名の「あ」と「り」から出てきている。「いちご」は3つの音平で平仮名の「い」「ち」「ご」からできている。平仮名文字を組み合わせることで、様々な言葉が増えていく。「語形法」はことばそのものを覚える方法である。例えば「「いぬ」なら「いぬ」、「さくら」なら「さくら」の書き方をまるごとおぼえこむ、まる暗記方式」である。」（＊文献6）

4. 特殊表記の平仮名指導法

特殊表記の平仮名は、46 文字終了の後すぐに習う。しかし、児童にとっては難解で、使いこなせるまでには時間を要する。

1）促音

小さな「っ」を入れると言葉が変化する。ねこ→ねっこ、まくら→まっくらのようにだ。 児童には、「ねっこ」と正解を告げるのではなく、「ねつこ」や「ねこっ」のように、わざと間違った表記を示し、まちがいを見つけさせ

写真 17.　促音の指導

る方法もよい。また手を打ちながら言葉を言うことも大切だ。
「ねっこ」であれば、「ね」「こ」と 2 回たたき、「っ」は手を握ることで区別する。

2)長音

昭和 61 年に内閣から現代仮名遣いという告示が出ている。

授業では、長音「あ段」「い段」「う段」「え段」「お段」の5つに分けて指導する。1時間目は「あー」と伸ばす言葉は何があるかをみんなで考えた。おかあさんやおばあさんがある。黒板に書きながら、同じように写させ、その後、まだ言葉を探せる児童には自分で言葉集めをさせた。

特に難しいのは、「え段」と「お段」である。「おねえさん」は「え」と伸びる音になるが、「けいさつ」「せんせい」「とけい」などは「い」を伸びる音に使う。「ろおそく」と読むが、「う」を伸びる音に使う。また、22 個の例外のうち小学校では7つを丸暗記する方がよい。「遠くの/大きな/氷の上を/多くの/狼/十ずつ/通った」(＊文献6)

3)拗音・長拗音

拗音とは「きゃ・きゅ・きょ」のようにねじれた音のことである。ねじれた音の表を使い、きゃ・きゅ・きょ、しゃ・しゅ・しょ、ちゃ・ちゅ・ちょ　にゃ・にゅ・にょ・・・と声を揃えて読む。その後、言葉集めをする。言葉集めでは、児童からたくさんの言葉が出された。拗音や長拗音を使った言葉が多くあることがわかる。

写真 18.　長拗音の指導

また、書く時は、「きゃ」はきゃーと伸ばすと、「き」と「や」の音でできているとわかる。表記については、「き」と小さい「ゃ」だよと教える。マス黒板を使って、小さい文字を書く場所を教える。

4)助詞

「は」「が」「へ」「を」の助詞を使えるようになって、文を書くことができる。助詞の中で特に「は」と「を」は「わ」と「お」の音と同じなので、児童は間違いやすい。1 年生の 1 学期に教科書を使って使い方を教えるが、一度で定着しない。よって、一年間かけて繰り返し助詞の指導を行っていく。

「助詞」という表記は難しいので、「くっつきのは」というように読んでいる。

それは、ものにくっついて使う文字という意味である。

写真 19.　助詞カード

① 「は」の指導

画用紙に助詞を書き、教室にあるものにくっつけて文作りをする。

最初は教師が例示する。次に児童が棒を持ち、例えば鉛筆けずりを指したとする。

その後文を作る。「鉛筆けずりは赤い。」というようになる。他にももっと文を考え、ノートに書く。

写真 20. 助詞カードをつかう

② 「を」の指導

「タオルをバケツの中に入れ、た、「何をしたのか」と聞くと「入れた」をいう。そこで次のように書いた。(図ア)」(＊文献7) 「タオルをいれた」と子どもたちは言う。これではおかしいので「を」をどこに入れたらいいか、考えていく。わざと教師が間違い子ども達に正しい答えを引き出させる。

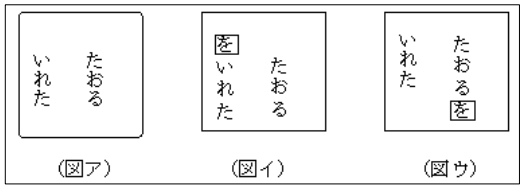

図３．をの指導

その後、「を」を使った文を考え、ノートに書き板書して共有する。

このように指導しても、クラスで数人はどうしても「を」と「お」の混同がある。毎回、声をかけ直すようにしている。

何度も使いながら、間違えた場合は訂正していく中で、徐々に定着していく。

写真 21．文作り

Ⅳ．1 年生で文字学習がうまくいかない場合　神経発達症（局所性学習症）の疑い

1）ディスレクシア（読み）

症例 ①とばし読みをしてしまう。（文中の語句を抜かしたり、行をとばしたりする）

②文末などを違う言葉に置き換えて読んでしまう。(「～でした。」を「～でしょう。」と読む)

③ 読んでいるところを目で追えない。

対策 ①指で押さえながら、読む。

②文節ごとにアンダーラインやスラッシュなどの区切りを引いてみる。

③1 行だけ見えるページカバーを利用し、読む部分のみを目立つようにする。

④教師が分かち書きを意識して範読する。

2）ディスグラフィア（書き）

症例 ①板書などの写し書きができない。

②読みにくい字を書く。

③マス目からはみ出してしまう。

④鏡文字を書く。

⑤拗音、撥音などの表記を間違う。

⑥教えていない独特の筆順で書いてしまう。

対策 ①薄く書いた赤鉛筆の字をなぞらせる。

②マス目を大きくする。

③写すところを目立つようにする。

④文字の書き始めや筆順などに番号やマークをつける。

⑤書く文章を声に出しながら書かせる。

3）注意欠如多動症（ADHD・ASなど）

症例 ①授業中集中できない。すぐに飽きて鉛筆や消しゴムで遊ぶ。

②字が雑である。

③次に何をするのかわからないとき不安になる。

④できない・わからないと思ったとたんパニックになる。

対策 ①座席の配慮

②45 分間の授業と考えず、15 分を2コマ程度に考える。15 分を読む。（カードを読む。教科書を読むなど） 15 分を書く。（平仮名ノートを書く。色を塗るなど） 残りの 15 分は絵本を読んだり絵を描いたりする。（全体指導の中で、個別指導が必要）

③授業は、同じパターン「型」で教える

カード→言葉集め→文節の手拍子→文字の部屋の確認→指書き・・・

④テンポとリズムをよくする。空白の時間をできるだけ作らないように、指示作業を繰り返す。

⑤ノートのマス目を意識させ、はみ出ないように書かせる。赤鉛筆で薄く書き、なぞらせる。

⑥間違った場合は、「これ、惜しいな」と言い、間違いを否定しない。「直しをしよう」という意欲を持たせる言葉掛けをする。

Ⅴ．終わりに

4 月に入学して間もなくの児童に平仮名調査を行い、平仮名指導を行った 7 月初旬にも再度同じ調査を行った。手元に5年間で 410 名の記録がある。これらを観ると、平仮名指導後、1 年生 1 学期時点で「読み」は 95％の達成率(2022・2023 年)、「書き」は 83％の達成率となっており、平仮名指導は効果があったと言える。

保育所・幼稚園時代の経験は、個々様々であり、どの児童にも興味を持たせ効果のある指導法を追究してきた。読みでは、フラッシュカードが効果的であった。全員読みはもちろん、一人読みで読みの点検もできた。結果 2023 年のクラスでは、支援が必要な児童（入級児）2名以外は全員すらすら読むことができるようになった。また、書きでは、毎時間同じパターンで行うことで、支援が必要な児童にも見通しを持たせることができた。授業では言葉集め、音韻を意識した手拍子、発音、文字の部屋の発表などを取り入れることで、ただ、おけいこ帳を練習する受け身的な授業ではなく、児童自ら活動できる場面を作った。そして「指書き」を重視し、鉛筆を持つ前に何度も机に書くことで覚えることができた。さらに、ノート点検や黒板テストで文字の評価を個別に行い、できた文字には褒めて花丸をつけ、できていない文字は児童のやる気をそがない程度に訂正した。このような指導の積み重ねが、児童の平仮名習得につながったと言える。

ただ、効果がないのではないかという教材もある。それはバラプリントである。バラプリントは、表と裏に何文字も練習しなければならず、書くことが苦手な児童の負担となっている。

また、特殊音節を持つ文字や、助詞は、1年生1学期だけではマスターしきれていない。今後も1年間かけて継続しながら指導していく。

注

① 平仮名専科は、1 学年全員の平仮名授業を担当する。

② フラッシュカードの見せ方（一瞬）は石川裕美氏考案の指導法である。

③ 向山式赤丸音読システムで、題名の横の空いている所に鉛筆で，小指の爪くらいの大きさの丸を 10 個書き、1 回読むごとに 1 個赤鉛筆で色を塗る音読指導である。

④話す聞くスキルは詩文の暗唱教材である。

⑤指書きは、向山洋一氏が漢字指導で行っている指導。鉛筆を持たずに指で机に筆順をいいながら書くことである。

⑥ なぞり書き（向山洋一氏実践）は、指で正しく書けるようになったら、鉛筆で丁寧になぞる指導法である。
⑦ 平仮名を音声法で指導する。一音が一文字に対応しているので一文字ずつ手を叩き、音で確かめる。促音や長音はそれぞれの動作を決めている。MIM（多層指導モデル）に詳しくあり、筆者が指導してきたことは MIM と同じであったことがわかった。
⑧ ジャンボホワイトノートは、大きなホワイトボードにマス目が入っている教具である。

文献

1 津守真 稲毛教子（1961）：津守・稲毛式 乳幼児精神発達診断、0～3歳 3～7歳
2 武井恒：書字の発達過程、TOSS-SNS 2022 年 8 月 10 日 https://toss-sns.workplace.com/photo/?fbid=182347440916751&set=pcb.781300912907382（参照 2023-08-06）
3 武井恒：幼児期と教科学習のレディネス、TOSS-SNS 2022 年 2 月 23 日 https://toss-sns.workplace.com/groups/601772040860271/?multi_permalinks=675154943521980&hoisted_section_header_type=recently_seen（参照 2023-08-06）
4 向山洋一(2002)：教え方のプロ・向山洋一全集 31 、熱中する授業は「授業の原則」に貫かれている、149 明治図書
5 天野 清（1985）：子どものかな文字の習得過程、21～37、71、81 秋山書店
6 須田 清（1967）：かな文字の教え方、8、36、168～179 むぎ書房
7 向山洋一（1985）：教師であることをおそれつつ 1 年生の学級経営、97 明治図書
8 向山洋一(1997)：向山洋一年齢別実践記録集 22「初めての 1 年生担任」38～43 東京教育技術研究所
9 永原光児（1992）：障害児に学ぶ文字指導、40～46 164～183 220～250 エイデル研究所
10 金田一春彦（1967）：日本語音韻の研究、東京堂出版
11 青木冴子（1972）：幼児の感覚教育、195～209 明治図書
12 明星学園・国語部(1964)：にっぽんご 1 もじのほん、むぎ書房
13 安原昭博（2012）：ADHD・LD・アスペルガー症候群かな？と思ったら、18～1、73～76 明石書店
14 品川裕香（2003）：怠けてなんかいない ディスレクシア、113～122 126～129 岩崎書店
15 文部科学省（2018）：小学校学習指導要領（平成 29 年告示）解説 国語編、東洋館出版社
16 文部科学省（2018）：幼稚園教育要綱（平成 29 年告示）東山書房
17 厚生省（2019）：保育所保育指針(平成 29 年 3 月 31 日)フレーベル館
18 長岡由記（2011）：小学校入門期におけるひらがな教育の研究、6～11 35 広島大学大学院学位論文
19 深川美也子(2021)：就学前から1年生のひらがなの土台作り 、文理閣
20 海津亜希子（2016）：多層指導モデル MIM アセスメントと連動した効果的な読みの指導、学研